

森  
鷗  
外

魚  
玄  
機





魚  
玄  
機



魚玄機ぎよげんきが人を殺して獄くだに下った。風説たちまは忽ち長安人  
 士の間りゆうでんに流伝せられて、一人として事の意表に出でた  
 のに驚かぬものはなかった。

唐とうの代よには道教さかんが盛であつた。それは道士等らが王室  
 の李姓りせいであるのを奇貨きかとして、老子を先祖だと言ない做し、  
 老君つかに仕そうびよううること宗廟そうびように仕なうるが如くならしめた為で  
 ある。天宝以来西の京の長安には太清宮たいせいきゆうがあり、東の  
 京の洛陽らくようには太微宮たいびきゆうがあつた。その外都会ほかことに紫極しきよく

宮きやうがあつて、どこでも日を定めておごそ厳かな祭が行われるのであつた。長安には太清宮の下しもに許多いくたの楼觀ろうかんがある。道教に觀かんがあるのは、仏教に寺があるのと同じ事で、寺には僧侶が居り、觀には道士が居る。その觀の一つを咸宜觀かんぎかんと云つて女道士魚玄機じよどうしぎよげんきはそこに住んでいたのである。

玄機は久しく美人を以て聞えていた。趙瘦ちようそうと云わむよりは、寧ろ楊肥むしやうひと云うべき女である。それが女道士になつているから、脂粉しふんの顔色をけが腕すを嫌きらつていたかとうと、そうではない。平生粧へいぜいよそおいを凝こらし容かたちを治かざつていた

のである。獄に下った時は懿宗いそうの咸通九年かんつうで、玄機は恰あたかも二十六歳になつていた。

玄機が長安人士の間に知られていたのは、独り美人ひととして知られていたのみではない。此女このは詩を善くした。

詩が唐の代に最も隆盛であつたことは言を待たない。隴ろう

西せいの李白りはく、襄陽じょうようの杜甫とほが出て、天下の能事のうじを尽した後

に太原たいげんの白居易はつきよが踵ついで起つて、古今の人情を曲尽きよくじんし、

長恨歌ちようこんかや琵琶行びわこうは戸とごとに誦そらんぜられた。白居易の亡

くなつた宣宗せんそうの大中元年たいちゆうがんねんに、玄機はまだ五歳の女児で

あつたが、ひどく怜悧れいりで、白居易は勿論、それと名を齊ひとしゆ

うしていたげんびし元微之の詩をも、多く暗記して、その数は古こ今こんたい体を通じて数十篇に及んでいた。十三歳の時玄機は始ごんぜつて七言絶句を作った。それから十五歳の時には、もう魚家ぎよかの少女の詩と云うものが好事者こうずしやの間に写し伝えられることがあったのである。

そう云う美しい女詩人が人を殺して獄に下ったのだから、当時世間の視聴を聳動しやうどうしたのも無理はない。

---

魚玄機の生れた家は、長安の大道たいどうから横に曲がって行



く小さい街にあつた。所謂いわゆる狭邪きようしやの地でどの家にも歌女かじよを養っている。魚家ぎよかもその倡家しようかの一つである。玄機げんきが詩を学びたいと言ひ出した時、両親りやうしんが快く諾だくして、隣街りんがいの窮措大きゆうそだいを家に招いて、平仄ひようそくや押韻おうえんの法を教えさせたのは、他日此子を揺金樹ようきんじゆにしようと言ふ願があつたからである。

大たい中ちゆう十一年の春であつた。魚家の妓数人ぎずが度々或る旗亭きていから呼ばれた。客は宰相さいしやう令狐綯れいことうの家の公子こうしで令狐滄れいこかくと云う人である。貴公子仲間の斐誠ひせいがいつも一しよに来る。それに今一人の相伴しょうばんがあつて、この人は温姓おんせいで、

令狐れいこや斐ひに鍾馗しやうき々々と呼ばれる。公子二人は美服びふく
 しているのに、温おんは独り汚あかれ垢あかついた衣きぬを着きていて、兎
 角公子等に頗いし使しせられるので、妓等ぎらは初め僮僕どうぼくではない
 かと思おもった。然しかるに酒さけ酣たけなわなわに耳熱みみねつして来きると、温鍾馗おんしやうき
 は二公子を白眼びやくに視みて、叱咤しつた怒号どごうする。それから妓に琴
 を弾ひかせ、笛ふえを吹ふかせて歌うい出です。曾かつて聞きいたことことのな
 い、美うしい詞ことばを朗らうかな声こゑで歌ううのに、その音調おんてうが好すく
 整ととのっていて、しろう人ととは思おもわれぬ程ほどである。鍾馗しやうきの諱名あだな
 のある于思うさい肝目かんもくの温おんが、二人の白面郎はくめんろうに侮あられるのを見
 て、嘲諷ちやうびやうの目標もくひやくにしてしていた妓等ぎらは、此時温おんの傍そばに一人

寄り二人寄つて、とうとう温を囲んで傾聴した。此時か  
 ら妓等は温と親しくなった。温は妓の琴を借りて弾いた  
 り、笛を借りて吹いたりする。吹弾すいたんの技も妓等の及ぶ所  
 ではない。

妓等が魚家に歸つて、頻しきりに温の噂うわさをするので、玄機  
 がそれを聞いて師匠そだいにしている措大そだいに話すと、その男が  
 驚いて云つた。「温鍾馗と云うのは、恐らくは太原たいげんの温岐おんき  
 の事だろう。又の名は庭筠ていいん、字は飛卿あぎなひけいである。拳場きよじょうに  
 あつて八たび手を叉こまぬければ八韻いんの詩が成るので、温八叉おんはつしや  
 と云う諱名もある。鍾馗と云うのは、容貌しゆうかいが醜怪しゆうかいだか

ら言うのだ。当今の詩人では李商隱りしよういんを除いて、あの人  
 の右に出るものはない。此二人に段成式だんせいしきを加えて三名家  
 と云っているが、段は稍劣ややっている」と云った。

それを聞いてからは、妓等が令狐れいこの筵会えんかいから帰る毎に、  
 玄機が温の事を問う。妓等も亦温おんに逢う毎に玄機の事を  
 語るようになった。そしてとうとう或る日温が魚家に訪  
 ねて来た。美しい少女が詩を作ると云う話に、好奇心を  
 起したのである。

温と玄機とが対面した。温の目に映じた玄機は将まさに開  
 かむとする牡丹の花のような少女である。温は貴公子連

と遊んではいるが、もう年は四十に達して、鍾馗の名に負そむかぬ容貌かみづかひをしている。開成かいせいの初はつに妻つまを迎えて、家には玄機けんと殆ど同年になる憲けんと云う子がいる。

玄機は襟えりを正ただして恭うやうやしく温ぬるを迎えた。初め妓等きどうに接かたするが如ごとき態度たいどを以もつて接かたしようとした温ぬるは、覺かたえず容かたを改かめた。さて語ことばを交まじえて見みて、温ぬるは直すぐに玄機けんが尋常じんじょうの女むすめでないことを知しった。何故なぜと云いうに、この花はなの如ごとき十五歳ごじゅうさいの少女しょうじよには、些ちとの嬌きやうしゆう羞ゆうの色いろもなく、その口吻こうふんは男子なんしに似にていたからである。

温ぬるは云いった。「卿けいの詩しを善よくすることを聞きいた。近業きんぎよう

があるなら見せて下さい」と云った。

玄機は答えた。「兎は不幸にして未だ良師を得ません。

どうして近業の言うに足るものがありました。今伯楽はくらくの一顧こを得て、奔蹠ほんていして千里を致すの思があります。願わくは題を課してお試み下さい」と云ったのである。

温は微笑を禁じ得なかった。この少女が良驥りようきを以て自ら比するのは、いかにもふさわしくないように感じたからである。

玄機は起たつて筆墨ひつぼくを温の前に置いた。温は率然そつぜん「江辺こうへん柳りゅう」の二字を書して示した。玄機が暫く考えて占出せんしゆつし

た詩はこうである。

賦得江辺柳

翠色連荒岸。烟姿入遠楼。影鋪秋水面。花落釣人頭。  
根老藏魚窟。枝低繫客舟。蕭々風雨夜。驚夢復添愁。

温は一誦しようして善よしと称よした。温はこれまで七たび拳きよ場じように入った。そして毎つねに堂々たる男子が苦索くさくして一句を成し得ないのを見た。彼輩かのはいは皆遠く此少女に及ばぬのである。

此これを始として温は度々魚家を訪ねた。二人の間には詩筒とうの往反おうへん織おるが如くになった。

温おんは大たい中ちゆう元う年がに、三十歳で太たい原げんから出でて、始はて進しん士し  
 の試しに応おじた。自じ己ぎの詩文は燭しよく一い寸すんを燃もさぬうちに成な  
 ったので、隣席のものが呻吟するのを見て、これに手てを仮か  
 して遣やった。その後き挙よ場じように入いる毎ごとに七八人の為ために詩  
 文を作る。その中ちゆうには及第するものがある。只ただ温おんのみは  
 いつまでも及第しない。

これに反はんして場外ばうがいの名なは京師けいしに騒さわいで、大たい中ちゆう四し年ねんに宰さい  
 相さうになつた令狐れいこ綯とうも、温おんを引見いんけんして度々えんせき筵席えんせきに列れつせしめ



た。或る日席上で絢とうが一の故事を問うた。それは莊子に出ている事であつた。温が直ちに答えたのは好いいが、その詞ことばは頗すこぶる不謹慎であつた。「それは南華なんかに出ております。余り僻書へきしよではございません。相公しやうこうも燮理しやうりの暇いとまには、時々読書をもなさるが宜よろしゅうございましょう」と云つたのである。

また宣宗せんそうが菩薩蛮ぼさつばんの詞ことばを愛するので、絢とうが填詞てんしして上たてまつつた。実は温に代作させて口止をして置いたのである。然るに温は酔つてその事を人に漏した。その上嘗かつて「中書堂内坐将軍ちゆうしやうだうないしやうぐんをぎせしむ」と云つたことがある。絢が無

学なのを譏そしつたのである。

温の名は遂に宣宗にも聞えた。それは或る時宣宗が一句を得て対たいを拳人きよじん中に求めると、温は宣宗の「金歩きんほ揺よう」に對するに「玉条ぎよくじよう脱だつ」を以てして、帝ていに激賞せられたのである。然るに宣宗は微行びこうをする癖があつて、温の名を識しつてから間もなく、旗亭きていで温に邂逅した。温は帝の顔を識しらぬので、暫く語を交えているうちに傲慢無礼の言げんをなした。

既にして拳場けんじやうでは、沈詢ちんじゆんが知拳ちきよになつてから、温を別席べつせきに居おらせて、鄰となりに空席を置くことになつた。詩名

は愈いよいよ高く、帝も宰相もその才を愛しながら、その人を鄙いやしんだ。趙顓ちようせんの妻になっっている温の姉などは、弟のために要路に懇請したが、何の甲斐もなかった。

温おんの友に李億ちおおくと云う素封家そほうかがあつた。年は温より十ばかりも少なくて頗すこぶる詞賦しふを解していた。

咸通元年かんつうの春であつた。久しく襄陽じようように往いつていた温が長安かえに還つたので、李がその寓居を訪ねた。襄陽では、温は刺史徐商ししよしやうの下で小吏しやうりになつて、稍やや久しく勤めてい

だが、終つひに厭倦えんけんを生じて罷やめたのである。

温の机の上に玄機げんきの詩稿があつた。李はそれを見て歎称した。そしてどんな女かと云つた。温は三年前から詩を教えている、花の如き少女だと告げた。それを聞くと、李は精くわしく魚家ぎよかのある街まちを問うて、何か思うことありげに、急いで座を起たつた。

李は温の所を辞して、径ただちに魚家に往つて、玄機を納いれて側室にしようと言つた。玄機の両親へいは幣いの厚いのに動された。

玄機は出いでて李と相見た。今年こゝろはもう十八歳になつてい

る。その容貌の美しさは、温の初て逢った時の比ではない。李もまた白晳はくせきの美丈夫びじょうふである。李は切に請こい、玄機は必ずしも拒まぬので、約束は即時に成就して、数日の後に、李は玄機を城外の林亭りんていに迎え入れた。

この時李は遽にわかに発した願が遽かなに愜かなったように思った。しかしそこに意外の障礙しょうがいが生じた。それは李が身を以て、近づこうとすれば、玄機は回避して、強いて逼せまれば号泣するのである。林亭は李が夕ゆうべに望を懐いだいて往き、朝あしたに興きようを失って還るの処となった。

李は玄機が不具ではないかと疑って見た。しかしもし

そうなら、初に聘へいを卻しりぞけた筈である。李は玄機に嫌わ  
 れているとも思うことが出来ない。玄機は泣く時に、一  
 旦避けた身を李に靠もたせ掛けてさも苦痛に堪えぬらしく泣  
 くのである。

李は屢しばしば催かつして曾かつて遂ついにげぬ欲望いぼの為めに、徒いたずらに精  
 神を銷磨しょうまして、行ぎよう住じゆう座ざ臥がの間あいだ、恍惚あいだとして失する所  
 あるが如くになった。

李には妻がある。妻は夫の動作が常に異なるのを見て、  
 その去住きよじゆうに意を注いだ。そして僮僕どうぼくに啗くらわしめて、玄  
 機の林亭りんていにいることを知った。夫妻は反目した。ある日

岳父が婿の家に来て李を面責し、李は遂に玄機を逐うことを誓った。

李は林亭に往って、玄機に魚家に帰ることを勧めた。

しかし魚は聴かなかつた。縦令二親は寛仮するにしても、

女伴の侮を受けると堪えないと云うのである。そこで

李は兼て交っていた道士趙鍊師を請待して、玄機の身

の上を託した。玄機が咸宜観に入つて女道士になったの

は、こうした因縁である。

玄機は才智に長けた女であつた。その詩には人に優れた剪裁せんさいの工たくみがあつた。温を師として詩を学ぶことになつてからは、一面には典籍の涉しやうりよう獵に努力し、一面には字句の錘鍊つうれんに苦心して、殆ど寢食を忘れる程であつた。それと同時に詩名を求めると念が漸く増長した。

李に聘へいせられる前の事である。ある日玄機は崇真觀しゆうしんかんに往つて、南楼に狀元じやうげん以下の進士しんし等が名を題したのを見て、慨然がいぜんとして詩を賦ふした。

遊崇真觀南楼。觀新及第題名処

雲峯滿日放春晴。歷々銀鈎指下生。



白恨羅衣掩詩句。拳頭空羨榜中名。

玄機が女子の形骸を以て、男子の心情を有していたことは、この詩を見ても推知すいちすることが出来る。しかしその形骸が女子であるから、吉士きつしを懐おもうの情じようがないことではない。ただそれは蔓草つるくさが木の幹まに纏まとい附まこうとするよ  
うな心であつて、房帷ぼういの欲ほではない。玄機は彼があつたから、李の聘へいに応じたのである。此これがなかつたから、林亭の夜は索莫さくもくであつたのである。

既にして玄機は咸宜かんぎ観かんに入いつた。李りが別わかれに臨まんで、衣食いしょくに窮きゆうせぬだけの財さいを餽おくつたので、玄機は安んじて

観内で暮らすことが出来た。趙ちやうが道書を授けると、玄機は喜んでこれを読んだ。この女のためには経けいを講じ史を読むのは、家常かじようの茶飯であるから、道家の言げんが却つてその新しんを趁おい奇を求め心よろこを悦ばしめたのである。

当時道家には中氣真術ちゆうきしんじゆつと云うものを行ならいう習ならいがあつた。毎月朔望さくぼうの二度、予あらかじめ三日の齋ものいみをして、所謂四目もく四鼻孔びこく云々の法しゆうを修しゆうするのである。玄機は追のがるべからざる規もと律の下もとにこれを修しゆうすること一年余にして忽然悟ご入にゆうする所があつた。玄機は真しんに女子しんになつて、李の林亭かんつうにいた日に知らなかつた事を知つた。これが咸通二年

の春の事である。

玄機は共に修行する女道士中のやや稍文字ある一人にんと親しくなつて、これと寢食を同じゆうし、これに心胸しんきようを披瀝ひれきした。この女は名を采蘋さいひんと云つた。ある日玄機が采蘋に書いて遣やつた詩がある。

贈隣女

羞日遮羅袖。愁春懶起粧。易求無価宝。難得有心郎。  
枕上潜垂淚。花間暗断腸。自能窺宋玉。何必恨王昌。

采蘋さいひんは体が小くて軽率であつた。それに年が十六で、  
 もう十九になつてゐる玄機せいきよよりは少いわかので、始終沈重ちんちよう  
 な玄機せいきよに制馭せいぎよせられていた。そして二人で争うと、いつ  
 も采蘋が負けて泣いた。そう云う事は日毎にあつた。し  
 かし二人は直ただちに又和睦わぼくする。女道士じよどうし仲間では、こう云  
 う風に親しくするのを対食たいしよくと名づけて、傍かたわらから擲揄  
 する。それには羨せんと妬ととも交まじつてゐるのである。  
 秋になつて采蘋は忽たちまち失踪した。それは趙ちようの所で塑  
 像を造つていた旅の工人が、暇いとまを告げて去つたのと同  
 時であつた。前あぎけに對食を嘲つた女等が、趙に玄機の寂

しがっていることを話すと、趙は笑って「蘋也飄蕩、蕙也幽独」と云った。玄機は字あざなを幼微ようびと云い、又蕙蘭とも云ったからである。

趙は修法の時に規律を以て束縛するばかりで、楼観ろうかんの出入などを厳にすることはなかった。玄機の所へは、詩名が次第に高くなつたために、書を索もとめに來る人が多かつた。そう云う人は玄機に金を遣やることもある。物を遣ることもある。中には玄機の美しいことを聞いて、名を

索書さくしよに藉かりて訪とうものもある。ある士人は酒を携えて来て玄機に飲ませようとすると、玄機は僮僕どうぼくを呼んで、その人を門外に逐おい出させたそうである。

然るに采蘋さいひんが失踪した後のち、玄機の態度は一変して、稍やや文字を識る士人が来て詩を乞い書を求めると、それを留とどめて茶を供し、笑語しょうご晷ひかげを移すことがある。一たび款待かんだいせられたものは、友を誘いざなって再び来る。玄機が客かくを好むと云う風聞ふうぶんは、幾いくばくもなくして長安人士の間に伝わった。もう酒を載せて尋ねても、逐おわれる虞おそれはなくなつたのである。

これに反して徒いたずらに美人の名に誘われて、目に丁字ていじなしと云う輩やからが来ると、玄機は毫ごうも仮借かじやくせずに、これに侮辱を加えて逐い出してしまふ。熟客じゆくかくと共に来た無学の貴介きかい子弟していなどは、幸にして謾罵まんばを免れることが出来ても、坐客ざかくがあるいは句を聯つらねあるいは曲きよくを度どする間あいだにあつて、自みづから視みて欠然けつぜんたる処から、独り窃ひそかに席を逃れて帰るのである。

客かくと共に謔浪ぎやくろうした玄機げんきは、客の散じた後に、快々おうおうと

して楽たのしまない。夜が更ふけても眠らずに、目に涙を湛たえ  
 ている。そう云う夜旅りよちゆう中の温おんに寄せる詩を作ったこと  
 がある。

### 寄飛卿

堦砌乱蛩鳴。庭柯烟露清。月中隣樂響。楼上遠山明。  
 珍簟涼風到。瑤琴寄恨生。嵇君懶書札。底物慰秋情。  
 玄機は詩筒しとうを発した後、日夜温の書の来るのを待った。  
 さて日を経て温の書が来ると、玄機は失望したように見  
 えた。これは温の書の罪ではない。玄機は求むる所のも  
 のがあつて、自らその何物なるかを知らぬのである。



ある夜玄機は例の如く、ともしび 燈の下もとに眉を蹙ひそめて沈思ちんししていたが、漸く不安になつて席を起ち、あちこち室内を歩いて、机の上の物を取つては、又直すぐに放ほう下かしなどしていた。良久ややしゆうして後、玄機は紙を展のべて詩を書いた。それは楽人陳某がくじんちんぼうに寄せる詩であつた。陳某ちんぼうは十日ばかり前に、二三人の貴公子と共に只一度玄機の所に來たのである。体格が雄偉ゆういで、面貌めんぼうの柔和な少年で、多く語らずに、始終微笑を帯びて玄機の挙止を凝視していた。年は玄機より少わかいのである。

### 感懷寄人

恨寄朱絃上。含情意不任。早知雲雨會。未起蕙蘭心。  
 灼々桃兼李。無妨国士尋。蒼々松与桂。仍羨世人欽。  
 月色庭階淨。歌声竹院深。門前紅葉地。不掃待知音。  
 陳は翌日詩を得て、直ただちに咸宜觀かんぎかんに來た。玄機は人しりぞを屏  
 けて引見し、僮僕どうぼくに客を謝することを命じた。玄機の書  
 齋からは只微かすかに低語ていごの聲が聞えるのみであつた。初夜  
 を過ぎて陳は辞し去つた。これからは陳は姓名を通ぜず  
 に玄機の書齋に入ることになり、玄機は陳を迎える度に  
 客を謝することになつた。

陳の玄機を訪うことが頻しきりなので、客かくは多く卻しりぞけられ  
 るようになった。書を索もとめるものは、只金を贈って書を  
 得るだけで、満足しなくてはならぬことになったのであ  
 る。

一月げつばかり後に、玄機は僮僕いとまに暇いとまを遣って、老婢ろうひ一  
 人を使うことにした。この醜悪な、いつも不機嫌な媪おうな  
 は殆ほとんど人に物を言うこともないので、観内の状況は世間  
 に知られることが少く、玄機と陳とは余り人に煩聒はんかつせら  
 れずにいることが出来た。

陳は時々旅行することがある。玄機はそう云う時にも客を迎えずに、籠居ろうきよして多く詩を作り、それを温に送つて政せいを乞うた。温はこの詩を受けて読む毎に、語中に閨人けいじんの柔情じゆうじようが漸く多く、道家の逸思いつしが殆ほとんど無いのを見て、訝いぶかしげに首を傾けた。玄機が李の妾しやうになつて、幾いくばくもなく李と別れ、咸宜觀に入つて女道士じよどうしになつた顛末てんまつは、悉く李の口から温の耳に入っていたのである。

---

七年程の月日が無事に立った。その時夢にも想わぬ災

害が玄機の身の上に戻って来た。

咸通八年の暮に、陳が旅行をした。玄機は跡に残って寂しく時を送った。その頃温おんに寄せた詩の中に、「満庭木葉愁風起、透幌紗窓惜月沈」と云う、例に無い凄惨せいさんな句がある。

九年の初春に、まだ陳が歸らぬうちに、老婢が死んだ。親戚の侍たのむべきものもない媪おうなは、兼て棺材かんざいまで準備していたので、玄機は送葬の事を計らって遣った。その跡へ緑翹りよくぎょうと云う十八歳の婢ひが来た。顔は美しくはないが、聡慧そうけいで媚態びたいがあつた。

陳が長安に歸つて咸宜觀に來たのは、えんよう艷陽三月の天で  
 あつた。玄機がこれを迎えるじよう情は、かつ渴した人が泉に臨  
 むようであつた。暫らくは陳がほとんどきよじつ殆虚日のないよう來  
 た。その間に玄機は、度々陳が緑翹をやゆ擲揄するのを見た。  
 しかし玄機は初め意に介せなかつた。なぜと云うに、玄  
 機もくちゆうの目中には女子としての緑翹はないと云つて好よい位  
 であつたからである。

玄機は今年二十六歳になつている。眉目端正な顔が、  
 迫り視みるべからざる程の氣高い美しさを具そなえて、新あらたに  
 浴を出た時には、琥珀色こはくいろうの光を放つている。豊かな肌は瑕きざ

のない玉のようである。緑翹は額の低い、頤おとがいの短い獅子かしに似た顔で、手足は粗大である。領えりや肘はいつも垢膩こうじに汚けがれている。玄機に緑翹を忌む心いのなかつたのは無理もない。

そのうち三人の關係が少しく紛糾して来た。これまでは玄機の挙措きよそが意に満たぬ時、陳は寡言かげんになったり、又は全く口を噤つぐんでいたりしたのに、今は陳がそう云う時、多く緑翹と語った。その上そう云う時の陳の詞ことばは極て温和である。玄機はそれを聞く度に胸を刺されるように感じた。

ある日玄機は女道士仲間に招かれて、某ぼうの楼観ろうかんに往いつた。書齋を出る時、緑翹にその観かんの名を教かえて置いいたのである。さて夕方になって帰ると、緑翹が門かどに出迎いえて云いった。「お留守に陳さんがお出いでなさいました。お出いになつた先を申ましましたら、そうかと云いつてお帰かえりなさいました」と云いった。

玄機は色を変かじた。これまで留守の間まに陳の来きたことは度々あるが、いつも陳は書齋に入いつて待まちっていた。それに今日は程ち近い所にいるのを知しつていて、待まちたずに帰かえつたと云いう。玄機は陳と緑翹との間に何等かの秘密があ



るらしく感じたのである。

玄機は黙って書齋に入つて、暫く坐して沈思ちんししていた。猜疑さいぎは次第に深くなり、忿恨ふんこんは次第に盛んになった。門かどに迎えた緑翹の顔に、常に無い侮蔑の色が見えたようにも思われて来る。温言おんげんを以て緑翹を賺すかす陳の声が歴々として耳に響くようにも思われて来る。

そこへ緑翹が燈ともしびに火を点じて持つて来た。何気なく見える女の顔を、玄機は甚だしく陰険なように看取した。玄機は突然起たつて扉に鎖じょうを下した。そして震ふるう声で詰問きつもんしはじめた。女は只「存じません、存じません」と云つ

た。玄機にはそれが甚しく狡猾こうかいなように感ぜられた。玄機は床の上に跪ひざまずいている女を押し倒した。女は懾おそれて目を睜みはっている。「なぜ白状しないか」と叫んで玄機は女の吭のどを扼やくした。女は只手足をもがいている。玄機が手を放して見ると、女は死んでいた。

玄機の緑翹りよくぎょうを殺したことは、稍やや久しく発覚せずにした。殺した翌日陳の来た時には、玄機は陳が緑翹の事を問うだろうと予期していた。しかし陳は問わなかった。

玄機がとうとう「あの緑翹がゆうべからいなくなりましてが」と云って陳の顔色を覗うかがうと、陳は「そうかい」と云っただけで、別に意に介せぬらしく見えた。玄機は前夜のうちに観の背後うしろに土を取った穴のある処へ、緑翹かばねの屍かばねを抱いて往いつて、穴の中へ推し墜おとして、上から土を掛けて置いたのである。

玄機は「生ける秘密」の為に、数年前から客かくを謝いしていた。然るに今は「死せる秘密」の為に懼おそれを懐いだいて、もし客を謝したら、緑翹の踪跡そうせきを尋ねるものが、観内に目を著けはすまいかと思つた。そこで切せつに会見を求

めるものがあると、強いて拒まぬことにした。

初夏の頃に、ある日二三人の客があつた。その中の一人が涼りようを求めて観うしろの背後に出ると、土を取った跡らしい穴の底に新しい土が填うまっていた、その上に緑色に光る蠅が群がり集まっていた。その人は只なんとなく訝いぶかしく思つて、深い思慮をも費さずに、これを自己の従者に語つた。従者は又これを兄に語つた。兄は府の衙卒がそつを勤めているものである。この卒は数年前に、陳が払ふつきよう曉ふつきように咸宜かんぎ観かんから出るのを認めたことがある。そこで奇貨きか措おくべしとなして、玄機おびやかを脅おびやかして金を獲えようとしたが、

玄機は笑って顧かえりみなかつた。卒はそれから玄機を怨んでいた。今弟の語ことばを聞いて、小婢しょうひの失踪したのと、土穴どけつに腥羶せいせんの気があるのとの間に、何等かの関係があるように思った。そして同班の卒数人と共に、鍤すきを持って咸宜観かばねに突入して、穴の底を掘った。緑翹の屍かばねは一尺に足らぬ土の下に埋まっていたのである。

京兆けいちようの尹温璋いんおんしようは衙卒がそつの訴うったえに本もとづいて魚玄機を逮捕させた。玄機は毫ごうも弁疏べんそすることなくして罪に服した。

楽人陳某がくじんちんぼうは鞫問きくもんを受けたが、情じようを知らざるものとして釈ゆるされた。

李億りおくを始はじとして、曾かつて玄機げんきを識しっていた朝野ちようやの人士じんしは、皆その才を惜んで救おうとした。ただ温岐おんき一人は方城じやうじやうの吏りになつて、遠く京師けいしを離れていたので、玄機がために力を致すことが出来なかつた。

京兆けいちやうの尹いんは、事が余りにあらわになつたので、法を枉まげることが出来なくなつた。立秋の頃に至つて、遂に懿宗いそうに上奏じやうそうして、玄機を斬ざんに処した。

玄機の刑せられたのを哀むものは多かつたが、最も深く心を傷めたものは、方城おんきにいる温岐おんきであつた。

玄機が刑せられる二年前に、温は流離りゆうりして揚州ようしゆうに往ゆつていた。揚州は大中たいちゆう十三年に宰相を罷やめた令狐絢れいことうが刺史ししになつてゐる地である。温は絢とうが自己を知つていながら用いなかつたのを怨んで名刺をも出さずにいるうちに、ある夜妓院ぎいんに酔つて虞候ぐこうに撃たれ、面おもてに創きずを負い前齒を折られたので、怒つてこれを訴えた。絢が温と虞候ぐこうとを対決させると、虞候は盛んに温の汗行あせこうを陳述して、自己は無罪と判決せられた。事は京師に聞えた。温は自ら長安に入つて、要路じようしよに上書して分疏ぶんそした。この時徐商じよしやうと楊収ようしゆうとが宰相に列していて、徐じよは温を庇護したが楊

が聴かずに、温を方城ほうじょうに遣つて吏務りむに服せしめたので  
 ある。その制辞せいじは「孔門以徳行為先、文章為末、爾既  
 徳行無取、文章何以称焉、徒負不羈之才、罕有適時之用」  
 と云うのであつた。温は後に隋ずいに遷うつされて死んだ。子  
 の憲けんも弟の庭皓ていこうも、咸通かんつうちゆう中に官ぬきんに擢ぬきんでられたが、庭皓  
 は龐勛ほうくんの乱らんに、徐州じよしゆうで殺された。玄機げんきが斬られてから  
 三月の後の事である。



## 参照

## 其一 魚玄機

三水小牘

南部新書

太平広記

北夢瑣言

続談助

唐才子伝

唐詩紀事

全唐詩(姓名下小伝)

全唐詩話

唐女郎魚玄機詩

## 其二 温飛卿

旧唐書

漁隱叢話

新唐書

北夢瑣言

全唐詩話

桐薪

唐詩紀事

玉泉子

六一詩話

南部新書

滄浪詩話

握蘭集

彥周詩話

金筌集

三山老人語錄

漢南真稿

雪浪齋日記

溫飛卿詩集





日本文学電子図書館

---

山椒大夫・高瀬舟

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店

昭和41年9月30日 42版発行

---



日本文学電子図書館